

「外国出版物の購入価格問題に関する調査研究」の報告書まとまる

国立大学図書館協議会では、昭和62年7月の草津総会において「外国出版物購入価格問題調査研究班」を設置し、円高に見られる為替相場の著しい変動の中で、国立大学図書館が購入する外国出版物について、適切な価格や購入方法の在り方を探るための調査研究をおこない、昭和63年6月に第1次報告書をまとめ、平成元年6月、最終報告書をまとめた。

「目録システム講習会」を開催

目録・所在情報の形成をより一層促進するため目録担当者の養成が迫られている。このため、学術情報センターと本学附属図書館の共催により近畿北部地区ネットワーク加盟館（滋賀、京都、奈良の国立大学）を対象に目録システム講習会（地域講習会）が下記のとおり開催された。

記

期 間： 8月29日～9月1日、9月5日～9月8日

場 所： 本学附属図書館地域共同利用室

受講者： 20名

なお、第1日目（8月21日）は、神戸大学自然科学研究科において学術情報センターの講師により「目録システム概論」および「目録情報の基準」についての講義があった。

《主題別研究集会》

CD-ROM の 利 用 状 況

近畿地区国公立大学図書館協議会主催の主題別研究集会が去る5月12日、京都大学附属図書館3階、A Vホールにおいて行われ、14大学から50名の参加があった。講師はコロンビア大学バトラー図書館情報技術部次長アニタ・ローリィ女史、ニューヨーク公共図書館研究図書館アン・スケリオン女史により講演され、通訳は松本女史が努められた。はじめに、アニタ・ローリィ女史が「コロンビア大学図書館におけるCD-ROMの利用状況」について、CD-ROMを導入する契機となったピューメモリアルトラストから、1987～1988年の2年間にわたり補助を受け、これによりCD-ROMの技術的評価、利用者や図書館に対する影響を調査した結果、現状及び展望について話された。この中で、1986年に市販されているCD-ROMは25種であったが1988年の後半には250種近

くになり、多くの主要なレファレンス・ソースがCD-ROMで利用できるようになった。OCLCの調査によると大学、研究図書館が他の図書館に比べCD-ROMを所有する傾向にある。ピューメモリアルトラストからの助成金により、36種のBibliographic及びNon-BibliographicのCD-ROMについて評価をすることができた。また、研究過程でのCD-ROMの果すユニークな働き及び図書館業務に対するCD-ROMの影響等について多くの様々な知識、経験を得ることができた。

次いで、アン・スケリオン女史が「ニューヨーク公共図書館におけるCD-ROMの利用状況」について、大都市の研究図書館でのCD-ROMの最近の利用状況、評価及び展望について話された。この中で、同図書館がCD-ROMを導入し